

# 京都市と畜場における豚丹毒発生動向

## 病理部門

### Swine erysipelas in the Kyoto City Slaughter House in 2003-2007

#### Division of Pathology

#### Abstract

Swine erysipelas in the Kyoto City Slaughter House was investigated in 2003-2007. In 2003-2006, 0-7 pigs were diagnosed as swine erysipelas a year. The numbers increased remarkably in 2007. Thirty-nine pigs were diagnosed as swine erysipelas in 2007. Twenty-two were the arthritis type, 9 were the endocarditis type, 4 were the urticaria type, and 4 were the septicemia type. Though swine erysipelas was found throughout the year in 2007, 22 out of 39 pigs were found in the January-March.

**Key Words** : 豚丹毒 swine erysipelas, 関節炎型 arthritis type, 心内膜炎型 endocarditis type, 蕁麻疹型 urticaria type, 敗血症型 septicemia type

## 1 はじめに

豚丹毒は豚丹毒菌 (*Erysipelothrix rhusiopathiae*) の感染によって起こる疾病であり、病型により、急性型 (敗血症型)、亜急性型 (蕁麻疹型)、慢性型 (心内膜炎型及び関節炎型) に分けられる<sup>1)</sup>。

本市と畜場における豚丹毒の発生状況は、近年、1年間に数頭程度であったが、平成19年度はこれまでと比較して著しく増加し、ごく短期間に集中して発生が認められることもあった。

そこで、今後のと畜検査業務に資することを目的として、平成15年度から平成19年度の間に豚丹毒と診断された豚のデータを改めて整理し、本市と畜場における豚丹毒の発生動向を解析したのでその概要を報告する。

## 2 方法

### (1) 調査対象

平成15年4月から平成20年3月までの期間に、京都市と畜場においてと畜された豚78,622頭の中で、豚丹毒と診断された51頭について調査した。

### (2) 調査方法

年度別、病型別及び農場別の豚丹毒発生頭数を集計した。また、著しく発生が増加した平成19年度については、各農場における病型別発生頭数及び月別発生頭数の集計も実施した。

## 3 結果

### (1) 最近5カ年の豚丹毒発生状況

平成15年度から18年度は、1年間に0~7頭の発生であったが、平成19年度では著しく増加し、39頭

の発生であった。(表1)

### (2) 最近5カ年の病型別豚丹毒発生状況

平成15年度から18年度では、平成15年度に蕁麻疹型が5頭発生した以外は、各病型とも0~2頭の発生にとどまっていた。これに対して、平成19年度は関節炎型が著しく増加し、22頭発生した。それ以外の17頭の内訳は、心内膜炎型が9頭、蕁麻疹型が4頭、敗血症型が4頭であった。(表2)

### (3) 最近5カ年の農場別豚丹毒発生状況

平成15年度は4農場(ABCD)から発生し、平成16年度はいずれの農場からも発生がなく、平成17年度は2農場(EF)からの発生であった。平成18及び19年度では2農場(AB)から発生したが、他の農場(CDEF)からの発生はなかった。(表3)

### (4) 平成19年度の農場別及び病型別豚丹毒発生状況

A農場では関節炎型が17頭、心内膜炎型が4頭、蕁麻疹型が1頭発生し、B農場では関節炎型が5頭、心内膜炎型が5頭、蕁麻疹型が3頭、敗血症型が4頭であった。(表4)

### (5) 平成19年度の月別豚丹毒発生状況

4月から12月では、1ヶ月に0~4頭の発生であるのに対して、1月から3月では、1ヶ月で7~8頭、3ヶ月間で合計22頭の発生があり、他の季節よりも多発していた。A農場では2月に6頭、B農場では1月に6頭、3月に5頭発生していた。(図1)

## 4 考察

本市と畜場における豚丹毒の発生が平成19年度に著

しく増加したが、発生農場は2農場（AB）に限られており、他の農場（CDEF）からの発生はなかった。このことから、当該農場（AB）における豚丹毒発生要因についての検討が重要と思われる。

当該農場を管轄している家畜保健衛生所からの情報及び当該農場の担当者から直接得られた情報により、A農場で肥育している豚の一部は、B農場から仔豚を導入して肥育されていることが判明している。さらに、A農場からの豚丹毒発生は、B農場由来の豚に多いようであるという情報も得られている。

B農場については、冬季に敗血症型が確認された際に聴取した情報により、ワクチンの接種方法を変更していたことが判明している。ワクチンが適切に接種されていなかったと考えられる出荷群（1月から3月）に集中して豚丹毒が発生していたことから、ワクチン接種方法の変更が、豚丹毒発生要因の一つであることが示唆された。

A農場については、B農場からの仔豚導入が発生要因の一つであると推察されるが、4月から6月では、B農場からの発生はなく、A農場のみから発生していたことから、発生要因は仔豚導入だけではなく、その他の要因も考慮して発生防止を図る必要があると考えられる。

豚丹毒の発生を予防するには、ワクチン接種の他に、

豚丹毒菌が蔓延しないように、飼養環境を衛生的に保つこと等が必要である。平成19年度には、豚の生産者に対してリーフレットを配布し、豚丹毒予防を啓発する取り組みを実施している。

蕁麻疹型は農場においても比較的発見が容易であり、特徴的な所見があるものは出荷しないよう要請している。これに対して、心内膜炎型及び関節炎型を農場段階で見極めるのは困難である。このため、蕁麻疹型はそれほど増加していないにもかかわらず、心内膜炎型及び関節炎型が増加するという結果になったのではないかと推察された。

平成19年度に豚丹毒が多発するという事態に至って、AB農場ともに、豚丹毒発生予防対策の実施を始めているという情報を得ている。今後、豚丹毒の発生はどのように推移するのかわからないが、当部門は食の安全を守るという立場から、引き続き、本市と畜場における豚丹毒の発生動向を注視していきたい。

## 5 参考文献

- (1) 清水悠紀臣，他編：動物の感染症，220-222(2004)，近代出版，東京

表1 最近5ヶ年の豚丹毒発生状況

年度	豚丹毒 (頭数)	と畜頭数
15	7	16,222
16	0	16,273
17	2	15,440
18	3	15,196
19	39	15,491
計	51	78,622

表2 最近5ヶ年の病型別豚丹毒発生状況

年度	豚丹毒 (頭数)				計
	敗血症型	蕁麻疹型	心内膜炎型	関節炎型	
15	0	5	2	0	7
16	0	0	0	0	0
17	0	0	2	0	2
18	0	2	0	1	3
19	4	4	9	22	39

表3 最近5ヶ年の農場別豚丹毒発生状況

年度	農場別豚丹毒 (頭数)					
	A	B	C	D	E	F
15	3	1	2	1	0	0
16	0	0	0	0	0	0
17	0	0	0	0	1	1
18	1	2	0	0	0	0
19	22	17	0	0	0	0
計	26	20	2	1	1	1

表4 平成19年度の農場別及び病型別豚丹毒発生状況

農場	豚丹毒 (頭数)				計
	敗血症型	蕁麻疹型	心内膜炎型	関節炎型	
A	0	1	4	17	22
B	4	3	5	5	17
計	4	4	9	22	39

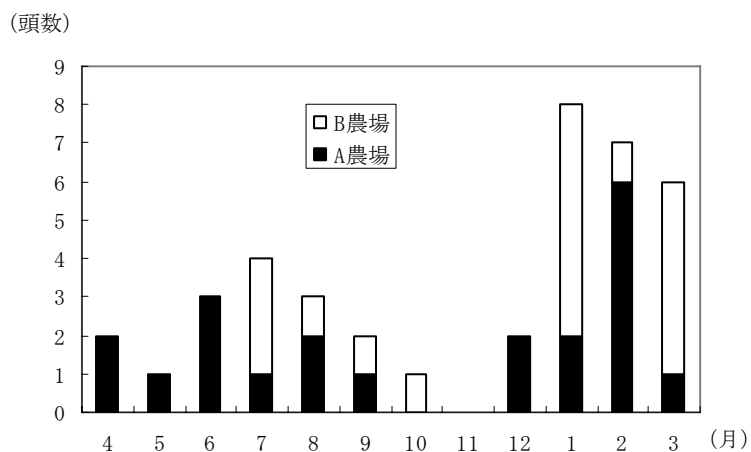


図1 月別豚丹毒発生状況 (平成19年度)